様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：２３９０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０２８３６

研究課題名（和文）古代日本における病と医学・医療に関する総合的研究―東アジア本草文化の視点から―

研究課題名（英文）Comprehensive research on diseases, medicine and medical care in ancient Japan-From the perspective of East Asian Honzo culture-

研究代表者
丸山　裕美子（MARUYAMA, YUMIKO）

愛知県立大学・日本文化学部・教授

研究者番号：００３１５８６３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本古代社会における病と医療・医学の実態を解明することを目指した。研究成果として、①新たに発見された唐医疾令断簡について検討を加え、日本医疾令の復原に関して最新の成果をまとめた。日本古代の医学・医療制度を法制史的に解明した。②平安時代の古記録にみられる病と医療を集成し、その実態を示した。③『延喜式』典薬寮式の訳注を完成させた。東アジアの本草文化の受容過程を具体的に明らかにしたものである。④台湾故宮博物院に所蔵される『本草和名』写本を閲覧調査し、『本草和名』の歴史的意義を明らかにした。⑤平安後期の『病草紙』について、性格を明確にし、また新たな模本を発見して、流布に関する知見を加えた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、グローバル化が進展する現代社会において、人類社会に共通する生と死、病と医療の諸相について、日本の古代社会を一事例として、歴史学的に明らかにすることを目指したものである。日本の古代国家は、中国・唐の医疾令を継受することによって、最新の医学教育制度と医療システムを確立し、それによって、医学・薬学の知識と技術の水準を飛躍的に高めることができた。その具体的な様相を、新たに発見された史料に基づいて明らかにしたところに学術的な意義がある。東アジアの本草文化がどのような歴史的過程を経て浸透したのかを示し、同時に、病や病者に対する社会のまなざしをも炙り出すことになった点に社会的意義があるといえよう。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to elucidate the actual condition of diseases and medicine /medical care in ancient Japanese society. As research results, (1) I examined the newly discovered Tang Yiji-ling and summarized the latest results regarding the restoration of the Japanese Ishitu-ryo. I elucidated the ancient Japanese medicine and medical system in legal and historical terms.(2) The disease and medical treatment found in the ancient documents of Heian era were integrated, and the actual situation in that era was shown. (3) I completed the translation of the " Engi-shiki Tenyakuryo-shiki". These are concrete clarification of the acceptance process of this Honzo culture in East Asia.(4) I read and researched "Honzo-wamyo" manuscripts collected in the Taiwan National Palace Museum, and clarified the historical significance of "Honzo-wamyo." (5) I clarified the character of "Yamai no Soshi" in the late Heian period, and discovered a new text and added knowledge on the distribution.

研究分野：日本古代史

キーワード：古代史　医学史　医疾令　唐代史　本草学　敦煌写本　病草紙

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（１）　研究代表者はかつて『日本古代の医療制度』（名著刊行会、1998 年）を刊行し、失われた唐と日本の医疾令の復原に成果をあげた。ところが 1999 年に唐医疾令を含む北宋天聖医疾令が発見され、2006 年にその全容が公刊された。その結果、唐医疾令の復原は再検討の必要が生じ、日本医疾令の復原にも修正が必要となった。日本医疾令は、日本古代の医学・医療制度を規定する法であり、まずはその正確な復原が求められていた。

（２）　制度を踏まえて、日本古代社会における病と医学・医療の実態を明らかにする研究について、研究代表者は「平安中後期の医学と医療」（『日本史研究』619、2014 年）を発表していたが、豊富に残る平安時代の古記録の分析はまだ不十分であった。

（３）　日本古代の医学・本草学（薬学）が、東アジアの医学・本草学の知識体系のなかでどのように位置づけられるのかといった検討は、これまであまりなされてこなかった。日本古代の医学・本草学は、先進的な中国の知識を、一方的に受容したとみなされ、独自の展開について注目する研究は少なかった。

（４）平安後期に制作された『病草紙』は、当該期の人びとの病や医療に対する知識・理解やまなざしを示すものであるが、その性格については六道絵とみるか、世俗絵とみるか、説が分かれており、再評価を行う必要があった。

２．研究の目的

本研究は、日本古代社会における病と医学・医療の実態を解明とすることを目的とするものである。

前近代における東アジア―中国、朝鮮半島、日本列島―の医学・医療は、基本的に共通する医学・本草学（薬学）の知識、医療技術の上に成り立っていた。病名・病態に関する知見も共有し、伝染病は国境を越えて―前近代には明確な国境線はなかったが―流行した。医学に関する知識・技術の伝播、相互に影響しあう医療制度の整備、アジア全域に広がる薬の流通の問題を含め、日本古代社会における病と医療の実相をグローバルな視点から把握する必要がある。グローバル化が進展する現代社会において、人類に共通する生と死、病と医療に関して、日本古代社会をモデルケースとして、前近代社会がどのように向き合っていたのかを具体的に明らかにすることを目指した。

３．研究の方法

（１）　北宋天聖医疾令から唐の医疾令を復原する作業を行う。天聖医疾令は、宋令 13 条、不行唐令 22 条であるが、逐条検討し、条文排列の復原も含め、より正確な復原試案を作成する。天聖令研究を継続している中国社会科学院歴史研究所や政法大学の研究者との意見交換も行いつつ、精度の高い復原を目指す。その上で、日本医疾令の復原について、再検討し、唐医疾令・北宋医疾令と比較しつつ、逐語・逐条を確定する。天聖医疾令を校訂した釈文を作成し、唐開元二十五年医疾令文の復原試案を提示し、排列も含め、日本医疾令の復原案の決定版を発表する。

（２）　平安中期・後期の古記録を精読し、当該期の病と医学・本草学、医書、医療、薬に関する史料を網羅的に集成する。奈良・平安前期についても、新出の木簡など関連する史料は随時収集し、その上で、日本古代社会における医学・本草学の知識、医療技術の受容と展開について検討を加え、病と医療の実態の具体的な様相を明らかにする。

（３）　これまでほとんど検討されてこなかった『本草和名』の歴史的意義について考察する。『本草和名』は日本で編纂された現存する最古の本草書である。台湾故宮博物院に所蔵される楊守敬旧蔵『本草和名』について閲覧調査し、国会図書館本、岩瀬文庫本、杏雨書屋本との関係を明らかにする。合わせて敦煌写本の唐『新修本草』（『本草和名』は『新修本草』によっている）と比較することによって、『本草和名』の東アジア本草文化における位置づけを見通す。

（４）　平安後期の絵画資料である『病草紙』について、美術史・医学史・風俗史その他の先行研究を踏まえて論点を整理し、その性格を明らかにする。『病草紙』は、日本古代社会において、どのような病があったのか、また人びとが病をどのように認識していたのかを示す極めて興味深い作品である。文字資料だけではない、ビジュアルな病の諸相とそれを「見る」人びとの視線を明らかにしておく。

以上を総合して、日本古代の病と医療についての全体像を、前近代東アジアの医学・医療の歴史のなかに位置づける。医学や医療の歴史は、病と闘う人類の歴史そのものである。その実態を文献に基づく実証的な手法により、具体的に解き明かしていくことを試みる。

４．研究成果

（１） 北宋天聖医疾令から唐医疾令を復原する試みについては、2006 年に天一閣博物館・中国社会科学院歴史研究所天聖令整理課題組『天一閣蔵明鈔本天聖令校証　附唐令復原研究』（中華書局）が刊行された直後から、継続的に続けていたが、本研究課題遂行中の 2017 年、新たに唐医疾令の断簡が、龍谷大学所蔵の大谷文書中に存在することが、劉子凡氏によって発見・紹介された。この成果を受けて、改めて、唐医疾令の復原と条文排列について検討し、私案を提示するとともに、日本医疾令の復原についても修正を加え、「唐医疾令断簡〈大谷三三一七〉の発見と日本医疾令」として、成果を公表した（発表論文等・図書②）。日本思想大系『律令』（岩波書店、1976 年）の復原する日本医疾令を全面的に改訂し、条文排列も含め、復原試案の決定版を作成することができた。

なお、唐と日本の医疾令についての復原と比較に関する研究成果は、一般にもわかりやすく解説、紹介した（発表論文等・雑誌論文②）。

（２） 平安時代の古記録から、当該期の病と医学・本草学、医書、医療、薬に関する史料を網羅的に集成して、日本古代社会における病と医療の具体的な様相を明らかにし、その成果として、「平安日記にみる疾病―摂関期の貴族の病と中国医学―」を発表した（発表論文等・図書⑤）。また藤原道長の病と医療について、『藤原道長事典―『御堂関白記』からみる貴族社会―』の「藤原道長の病と医療」の項目を担当して解説し、『御堂関白記』にみえる病や医療、薬についての事項解説を行った（発表論文等・図書④）。

この成果は、NHK・BS の TV 番組「偉人たちの健康診断」で紹介された（発表論文等・その他②）。これまでに蓄積した奈良時代の病と医療についての研究も踏まえ、各地の自治体などの生涯学習講座でも講演することによって、成果を社会に還元している。

（３） 10 世紀に成立した古代の基本的法典である『延喜式』の典薬寮式について、その訳注を完成させた。本研究以前から、20 年近い歳月をかけてつづけてきた研究の成果である。典薬寮式の各条文を読み下し、意味をとり、制度の淵源を考察し、規定される生薬・製剤について、中国の医書・本草書、日本の『医心方』、出土木簡や文献資料に目を配って、頭注・補注を作成した。今後の平安時代の医学・医療研究の基礎となる成果であると自負している（発表論文等・図書③）。

（４） 日本で編纂された現存する最古の本草書である『本草和名』については、これまで国語学の分野からの言及がいくつかみられる程度で、その歴史学的、医学史的な意義について、本格的に検討されてこなかった。本研究においては、台湾故宮博物院が所蔵する楊守敬旧蔵本を閲覧調査し、加えて大東急記念文庫、神習文庫、西尾市岩瀬文庫、武田科学振興財団杏雨書屋が所蔵する『本草和名』の写本を調査して、写本系統を確認した。写本の原本である紅葉山文庫本が所在不明である現在、岩瀬文庫本または台湾故宮博物院本を底本とした、校訂活字翻刻本の刊行が求められている。

また『本草和名』の構成を検討して、唐の『新修本草』との関係を明らかにし、あわせて同時代の敦煌写本の本草書とを比較した。『本草和名』と日本に伝世した『新修本草』とはよく一致する一方、敦煌写本『新修本草』とは異なる点も確認できた。

日本古代社会における本草知識が、「和名」ではなく「漢名」で記され、「呉音」で発音される時代から、「和名」で把握する段階へ、そして「漢音」で発音する段階へといたる歴史的な過程を明らかにした（発表論文等・雑誌論文⑤）。

関連して、敦煌写本医薬書についての著作の書評、正倉院薬物についての著作の書評も行った（発表論文等・雑誌論文③・④）。また「本草の来た道」と題した講演を京都学講座で行って、成果を社会に還元した（発表論文等・学会発表③）。

（５） 『病草紙』の研究は、当初の研究計画にはなかったのであるが、2017 年に杏雨書屋が所蔵する主要な模本が集成・刊行されたこと（『杏雨書屋所蔵　病草紙模本集成』武田科学振興財団）、『病草紙』研究の集大成ともいうべき加須屋誠・山本聡美『病草紙』（中央公論美術出版）が刊行されたことを受けて、その絵巻としての評価について再検討する必要を感じた。その成果を杏雨書屋で発表した（発表論文等・論文①、学会発表②）。

『病草紙』をめぐっては、それが宗教画か世俗画か、あるいは説話的な要素や病気の症例集的なところをどう捉えるかという問題があった。近年の研究では、山本聡美氏によって、『正法念処経』との関連が主張され、六道絵巻とする説が有力となっている。しかし、詳細に検討すると、仏典との関係を認めることは難しい。これまで指摘されてこなかったが、「物尽くし」としての「病尽くし」の一種とみるべきであること、中国から舶載された「医事説話」の影響を考えるできではないかという新しい視点を示した。この成果については、朝日新聞「文化の扉」欄に紹介された（発表論文等・その他①）。

また、関戸家本『病草紙』の新出の模本を発見、購入し、科研費により印刷・刊行した（発表論文等・図書①）。近世の関戸家本『病草紙』の流布について、これまで知られていなかった奥書を紹介し、新しい知見を示すことができた。

（６）上記の他に、敦煌・トルファン写本の医書について、その接続関係を整理した。敦煌・トルファン写本は、各国の探検隊が持ち帰り、現在それぞれの国に所蔵されているが、なかには探検隊を越えて接続するものがある。敦煌写本の本草書を検討した際にも気になっていたことではあるが、機会を得て、情報をまとめることができた（発表論文等・学会発表①）。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計５件）
① 丸山　裕美子、平安時代の医学と『病草紙』、杏雨、査読無、22 号、2019、pp.6－39
② 丸山　裕美子、医疾令と日本古代の医療、鍼灸、査読無、132 号、2019、pp.127-130
③ 丸山　裕美子、（書評）岩本篤志著『唐代の医薬書と敦煌文献』、唐代史研究、査読有、19 号、2016、pp.200-205
④ 丸山裕美子、（新刊紹介）米田該典著『正倉院の香薬』、古代文化、査読有、68－2 号、2016、pp.141
⑤ 丸山　裕美子、敦煌写本本草と日本古代の本草―『本草和名』の歴史的意義―、敦煌写本研究年報、査読無、10 号、2016、pp.399-411

〔学会発表〕（計５件）
① 丸山　裕美子、医書の群外接続、諸国探検隊収集・欧亜諸国保管西域出土史料の包括的再点検による東アジア史料学の革新、2018
② 丸山　裕美子、平安時代の医学と『病草紙』、武田科学振興財団杏雨書屋第 39 回研究講演会、2018
③ 丸山　裕美子、本草の来た道―日本古代の医学・薬学―、京都学講座、2016
④ 丸山　裕美子、東アジアの人の移動と奈良時代の文化―百済・高句麗遺民（移民）の動きを中心に―、第 61 回国際東方学者会議、2016
⑤ 丸山　裕美子、敦煌写本本草と古代日本の本草、敦煌学国際学術研討会 2015、2015

〔図書〕（計５件）
① 丸山　裕美子、愛知県立大学所蔵病草紙（関戸家本『病草紙』模本）、愛知県立大学日本文化学部、2019、44pp.
② 小口　雅史（編）、律令制と日本古代国家、同成社、2018、378pp.（丸山裕美子、唐医疾令断簡〈大谷三三一七〉の発見と日本医疾令―劉子凡「大谷文書唐《医疾令》《喪葬令》残片研究」を受けて―、pp.312-333）
③ 虎尾　俊哉（編）、訳注日本史料　延喜式　下、集英社、2017、1506pp.（丸山　裕美子、典薬寮式：頭注・補注、pp.336-413、1021-1045、1214-1229）
④ 大津　透・池田　尚隆（編）、藤原道長事典―『御堂関白記』からみる貴族社会―、思文閣出版、2017、462pp.（丸山　裕美子、藤原道長の病と医療他、pp.392-403）
⑤ 安田　政彦（編）、生活と文化の歴史学８　自然災害と疾病、2017、竹林舎、495pp.（丸山裕美子、平安日記にみる疾病―摂関期の貴族の病と中国医学―、pp.124-149）

〔その他〕
①朝日新聞 2018 年 8 月 6 日「文化の扉」『病草紙』について記事が掲載された。
②NHK・BS「偉人達の健康診断」（藤原道長の病について）に出演した。（2018 年 2 月）
③朝日新聞土曜版 be の連載コラム「表裏の歴史学」の 2016 年 3 月 26 日、2016 年 5 月 28 日、2016 年 10 月 1 日、2016 年 11 月 26 日掲載分に古代の医療に関わる文章を掲載した。

６．研究組織

(1)研究分担者
該当なし

(2)研究協力者
研究協力者氏名：手嶋　大侑
ローマ字氏名：(TESHIMA, daisuke)

研究協力者氏名：陳　睿垚
ローマ字氏名：(CHEN, rui yao)

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。